

おおともあさこ 大友麻子

学位の種類 博士（国際文化）

学位記番号 国博第69号

学位授与年月日 平成19年3月27日

学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当

研究科・専攻 東北大学大学院国際文化研究科（博士課程後期3年の課程）
国際文化交流論専攻

学位論文題目 英語複合動詞構文の研究
－構文文法によるアプローチ－

論文審査委員 （主査）

教授 小野尚之

教授 宮本正夫

助教授 中本武志

助教授 ナロック ハイコ

教授 山口 登

論文内容の要旨

第1章 序

1.1 本論文で扱う領域

本論文は、構成要素間の結びつきが慣用的、または非合成的といわれる表現として英語の複合動詞構文（complex verbal structures, Nickel 1968）を研究の対象に選び、その動的な構成原理を明らかにする。

この構文の統語構造は、動詞と目的語の事象名詞句から成る。便宜上、本論文では「動詞＋事象名詞句（以下、V + NP_E）」構文と表記する。この構文の意味的特性は、動詞句の意味内容の大半が、動詞ではなく、事象名詞句によって表されることである。動詞の役割は、主に時制、人称、数といった文法的情報を示すことに限られる。そのためこの構文内の動詞は、語彙的意味を持たない動詞という意味で、軽動詞（light verb）とよばれてきた。一般に、have、take、make、giveがいわゆる軽動詞の代表的なメンバーとして分類される。

(1) に「V + NPE」構文の例を示す。まず (1 a) は、「Meg がコーヒーを啜った」ことを表す最も基本的な表現である。これと同様の意味を、「V + NPE」構文でも表すことができる。それが (1 b) の文である。(1 a) の動詞 sip を (1 b) では事象名詞句 a sip へと転換し、いわゆる軽動詞の take に後続させている。

- (1) a. Meg sipped the coffee. (基本構文)
b. Meg took a sip of the coffee. (「V + NPE」構文)

1.2 本論文の目的と主張

(i) 意味の合成性と慣用性

「V + NPE」構文では、構文内に生起できる事象名詞句を予測したり、動詞と事象名詞の組み合わせに規則を見出すのが容易ではない。Sapir (1949) も指摘するように、この構文の最大の問題は、恣意性または慣用性の高さにある。

本論文では、このような「V + NPE」構文の特性について、次のように主張したい。言語表現は、合成的な表現と非合成的な慣用表現に二分されるのではなく、どれも意味の合成性と慣用性を併せ持つ。「V + NPE」構文に関していえば、この構文では動詞に意味内容が殆どないという点と、動詞と事象名詞句の結びつきが恣意的であるという点から慣用表現として扱われることが多い。しかし、この構文内の動詞の意味も、実際は全体の意味に貢献することから、慣用性だけでなく、合成性も十分に備えている。

(ii) 動詞と構文、または複数の構文間の関係

「V + NPE」構文というカテゴリーに関するもう1つの問題は、この構文カテゴリーに属するメンバーは、「have + NPE」構文、「take + NPE」構文、「make + NPE」構文、「give (+ NP) + NPE」構文などのほかにも存在するのであるが、先行研究では殆ど注目されていないことである。

(2) の動詞は cut であるが、事象名詞句を従え、文は「Eric が Sally をちらっと見た」ことを表す。「V + NPE」の形式にも当て嵌まる。つまり統語も意味も have a quick look や take a quick look と並行しているかのようである。

- (2) Eric cut a quick look at Sally.

しかし出現頻度の高い「have + NPE」構文や「take + NPE」構文に比べ、この「cut + NPE」構文や「hit + NPE」構文の出現頻度は極端に低く、あまり馴染みがない。つまり「V + NPE」構

文カテゴリーのメンバーには中心的なものと同期的なものがある。このように不均質なメンバーを含むカテゴリーは、プロトタイプ理論によるカテゴリー観によって適切に捉えることができる。また、用法基盤モデル (usage-based model、Langacker 1987ほか) により、メンバー間の関係も明らかにすることができる。

1.3 理論的枠組み：構文文法 (Construction Grammar)

本論文では Goldberg (1995、2006ほか) らが提唱する構文文法 (construction grammar) を理論の枠組みに採用する。構文文法とは、構文 (construction) を自立した言語単位と考える言語理論である。言語表現には、各語彙項目の意味や文法規則には還元できない意味が存在する。この還元できない意味は、慣用的な意味と考えられる。

1.4 先行研究

1.4.1 意味の合成性と慣用性に関する先行研究

人間の脳が持つ記憶容量は有限であり、処理能力にも一定の限界があると考えられる。それにもかかわらず個別言語の母語話者は、過去に聞いたことのない表現でも理解することができ、また自ら産出することができる。これは言語に「合成性の原理」が働いているためである。つまり、ある言語表現の意味 (e.g. They hate Math.) は、各構成要素 (they, hate, Math) の意味の総和と文法規則から得られるというもので、この合成性こそが言語表現の創造性の源となっているという考えである。

このような考え方は、形式意味論においては第一の基盤となる作業原理である。しかし自然言語では、必ずしも各構成要素の意味と文法規則のみで表現全体の意味を算出できるとは限らない。例えば、kick the bucket は「死ぬ」という意味があるが、この意味を各構成要素 (kick, the, bucket) の意味から導き出すことはできない。このように、合成性の原理に従わず、語の意味と統語構造から全体の意味を予測できない表現は、イディオムとして、一般の言語表現とは異なる、特殊で同期的な事例とされてきた。

1.4.2 「V + NP_E」構文に関する先行研究

1.5 本論文の構成

第2章 「V + NP_E」構文カテゴリー

この章では「V + NP_E」構文という文法カテゴリーを想定し、このカテゴリーに属するメンバー間の関係に着目しながら議論を進める。「have + NP_E」構文、「take + NP_E」構文、「make +

NP_E」構文、「give (+ NP) + NP_E」構文といった構文群は、「V + NP_E」という形式と一定の意味を共有し、一般に軽動詞構文と称されるカテゴリーを構成する中心的メンバーである。本論文では、このカテゴリーを「V + NP_E」構文カテゴリーとよぶことにする。

このカテゴリーに属する構文群の関係は、認知言語学のプロトタイプ論を土台にした用法基盤モデルによって適切に捉えられることを示す。このモデルは「スキーマ」、「プロトタイプの（または中心的）メンバー」、「拡張的（または周辺的）メンバー」の3つの要素から成り、カテゴリーの常に流動する性質を重視したものである。次に、「V + NP_E」構文スキーマがどのような意味を持つかを示し、続いて中心的メンバーの「have + NP_E」構文や「take + NP_E」構文が、構文スキーマである「V + NP_E」の意味と、それぞれの動詞の意味を融合させている様子を考察する。

2.2 構文文法論者が「V + NP_E」構文を避ける理由

「V + NP_E」構文は非常によく使われる形式であるにも関わらず、学術的にはあまり関心を持たれていない。特に、構文という言語単位存在を積極的に認め、結果構文、中間構文、way 構文などの分析を盛んに行なっている構文文法理論研究者については、この「V + NP_E」構文についても同様の関心を向けてよさそうなものであるが、実際はむしろ避けられているようである。なぜこのように研究対象として取り上げられないのであろうか。その理由として、「V + NP_E」構文が構文文法理論の枠組みでは上手く扱えないという印象を与えているということが考えられる。

構文文法では、文（節）の意味は構文の意味と動詞の意味の融合によって成り立つと考える。動詞には、フレーム意味論的な複合的な意味が想定されており、どのような統語構造の中に現れても、同じ意味を表す。例えば、動詞 wipe は他動詞構文 (e.g. Sarah wiped the table.) と融合しようと、結果構文 (e.g. Sarah wiped the table clean.) と融合しようと、wipe 自体の意味は一定で変わりはない。この Sarah wiped the table clean. の例では、結果構文の意味と動詞 wipe の意味との合成が動詞句全体の意味である、と明確に表すことができる。ちなみに wipe の「布などでテーブルの表面を拭く」という語彙の意味は、状態変化を起こすための「手段」に関する情報を提供する。一方、「V + NP_E」構文内の動詞は、軽動詞という名称で呼ばれていることからわかるように、語彙の意味を殆ど持たず、文法的情報（人称・数・時制）を示すのが主な役割と定義されることが多い (Cattell 1984ほか)。例えば (3) の文では、事象名詞句の a walk が「散歩する」という意味内容を担っており、動詞の take は3人称、単数、現在時制という情報を伝えるのみである。

(3) Emma takes a walk every morning.

つまり、「V + NP_E」構文内の動詞はほとんど実質的な意味内容を持たないという定義を正しいとすると、この構文を用いた表現では、動詞の意味と構文の意味の融合という手段が使われていないということになる。

2.3 「V + NP_E」構文の先行研究の問題点

「V + NP_E」構文カテゴリーの構成メンバーは、「have + NP_E」構文、「take + NP_E」構文、「make + NP_E」構文、「give (+ NP) + NP_E」構文の4つに固定され、閉じた類を成しているというのが先行研究での前提である。

「V + NP _E 」構文カテゴリー	
• 「have + NP _E 」構文	e.g. have a drink, have a shave, ...
• 「take + NP _E 」構文	e.g. take a bath, take a sip, take a walk, ...
• 「make + NP _E 」構文	e.g. make an appeal, make a promise, ...
• 「give (+ NP) + NP _E 」構文	e.g. give someone a smile, ...

図1. 「V + NP_E」構文カテゴリーの静的な体系

つまり単に羅列されただけのカテゴリーである。メンバーは固定され、完全に静的である。しかし、このカテゴリーに属すると思われる例はほかにも存在する。それが第3、4章で扱う「cut + NP_E」構文、「hit + NP_E」構文である。

2.4 用法基盤モデル (Usage-Based Model)

2.4.1 プロトタイプ理論によるカテゴリー観

人間は、言語能力に限らず、一般的な能力として、物事を「カテゴリー化」することができる。プロトタイプ理論では、この典型性について、メンバー間で違いがあると考えられる。「V + NP_E」構文カテゴリーにおいても、プロトタイプのメンバーの「have + NP_E」構文、「take + NP_E」構文のなどほか、周辺のメンバーとして「cut + NP_E」構文や「hit + NP_E」構文が存在する。これらの不均質的なメンバー間の関係は使用依拠モデルで表すことができる。

まずは「have + NP_E」構文、または「take + NP_E」構文などを頻繁に見聞きし、また使用すると、これらはプロトタイプとして文法体系の中に定着 (entrenchment) する。やがて複数のプロトタイプのメンバーの共通性が、「V + NP_E」構文として抽出される。これがスキーマである。次に、この構文スキーマ (constructional schema) を基に have や take 以外の動詞を融合させた新

しい形式が生み出される。「cut + NP_E」構文や「hit + NP_E」構文はこのプロセスから「V + NP_E」構文カテゴリ内に組み込まれたものと考えられる。これらの新しい構文は、プロトタイプのメンバーと比較すると生産性や使用頻度が低いが、これは文法知識としてまだ完全には定着していない状況にあると説明することができる。このように、構文スキーマという抽象的な言語単位は、下位レベルにある具体的表現の使用とその蓄積からボトムアップ式に取り出される。

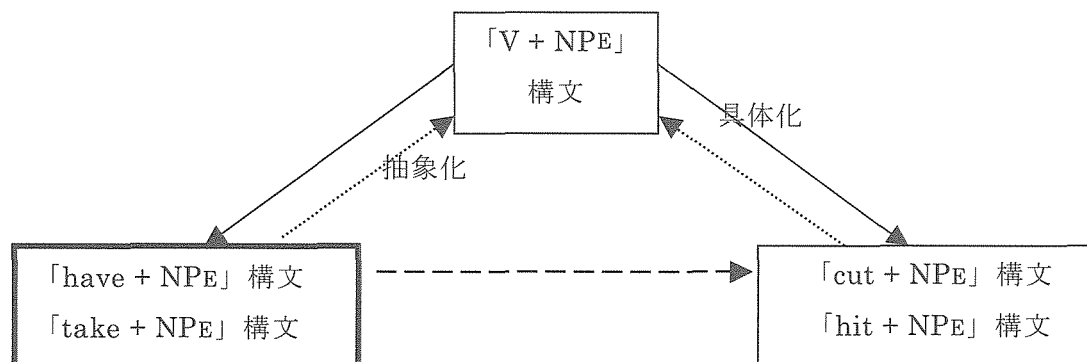


図2. 「V + NP_E」構文スキーマとメンバー間の相互関係

2.4.2 頻度 (frequency)

2.4.3 言語習得

2.5 「V + NP_E」構文カテゴリの中心的メンバー

2.5.1 「V + NP_E」構文スキーマ

2.5.1.1 「V + NP_E」構文と基本構文の比較

動詞を名詞に転換させた事象名詞を含む「V + NP_E」という構文は、時間の経過に沿って事象の具体的な中身を丁寧に、詳細に描写するというよりは、事象を1つのコンパクトなまとまりとして凝縮させて捉え、主体がその事象を短時間に行なう様子を描写する。この構文が時間的限定性を備えていることは、(4b, c) の all day のような副詞句とは相性が悪いことから確かめられる。

- (4) a. I walked {for five minutes/all day}.
- b. I had a walk {for five minutes/*all day}
- c. I took a walk {for five minutes/*all day}

この構文が持つ一次的な機能は、「主体が、とある事象を短時間だけ行なう様子」の描写で、その「とある事象」とは何かということ、歩くことである、というように、事象の具体的な内容の描写は二次的な機能と考えられる。ここが動詞によって事象の展開をダイナミックに描写する基本構文

と異なる点といえよう。

次の図は、Langacker (1991) による He fell. と He took a fall. の状況の捉え方の違いを示したものである。基本構文ではaからdまでの状況の変化を時間の経過に沿って捉えているのに対し、「take + NP_E」構文では a から d までを1つにまとめて一度に捉えている。

(a) He fell.

(b) He took a fall.

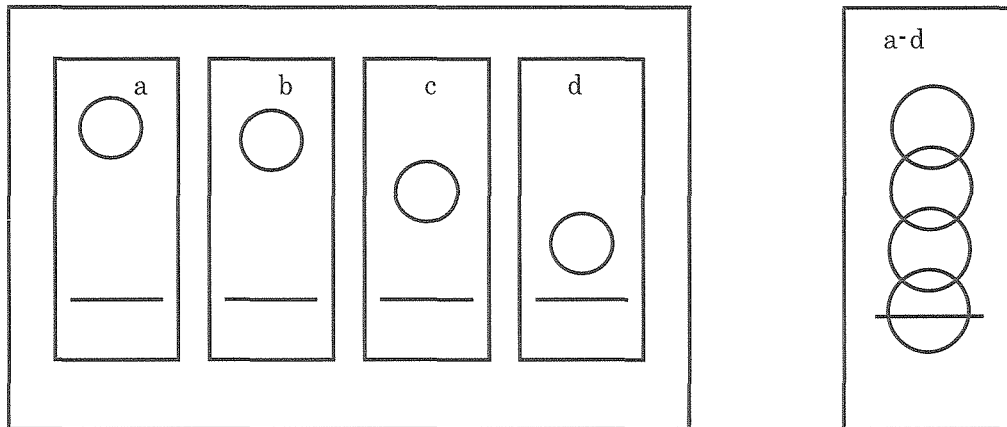


図3. Langacker (1991 : 80)

2.5.1.2 構成要素への制約

「V + NP_E」構文には2つのスロットがあるが、どのような動詞、事象名詞句でも生起できるわけではなく、それぞれに制約がある。

2.5.2 「have + NP_E」構文

「have + NP_E」構文以下4つの中心的メンバーも、「V + NP_E」構文の意味と、それぞれの動詞の語彙的意味を融合させた、独自の意味を表す。

2.5.3 「take + NP_E」構文

2.5.4 「make + NP_E」構文

2.5.5 「give (+ NP) + NP_E」構文

2.6 まとめ

第3章 「cut + NP_E」構文

3.1 はじめに

3.2 cut の意味

語義の意味記述には、「数え上げ (enumeration) のアプローチ」、「単義性 (monosemy) のアプローチ」、「多義性 (polysemy) のアプローチ」がある。本論では単義性のアプローチをとり、(5 a) が cut の「意味の核 (core meaning)」と考える。この cut の意味が「cut + NP_E」構文にも反映している。

(5) cut の意味記述

a . cut1 「鋭利な切断」 (To divide into two or more with a sharp-edged instrument)

e.g. *John cut the bread into four slices.*

b . cut2 「削除」 (To separate or remove by cutting)

e.g. *John cut Meg from the team.*

c . cut3 「削減」 (To shorten or reduce by cutting off a portion)

e.g. *John cut the budget by half.*

d . cut4 「創造」 (To make or form by cutting)

e.g. *John cut a slice of bread.*

3.3 「cut + NP_E」構文の特性

3.3.1 時間的特性

3.3.2 事象名詞のアスペクト性

3.3.3 外向きの事象

cut の「他者へ働きかけをする」という外向きの意味が影響し、「cut + NP_E」構文内に生起する事象名詞句が表す事象も、外向性のあるものに絞られる。

		CUT	GIVE		MAKE	HAVE	TAKE
			NP NP _E	NP _E			
		モノを 切断する	外へ放出する		創り出す	内で 所有する	内へ 取り込む
身体 活動	口 頭 e.g. shout, sing	✓	✓	✓	✓	✓	
	動 作 e.g. dash, turn	✓	✓	✓	✓	✓	✓
	飲 食 e.g. bite, drink					✓	✓
	知覚 (内) e.g. taste, sniff					✓	✓
	知覚 (外) e.g. look, stare	✓	✓	✓	✓	✓	✓
知的 活動	情報伝達 (相互) e.g. chat				✓	✓	
	情報伝達 (外) e.g. order	✓	✓	✓	✓		
	感情・意志 (内) e.g. belief				✓	✓	✓
	感情・意志 (外) e.g. refusal	✓		✓	✓		
関係表示 e.g. contract, contrast		✓			✓		

表1. 各動詞と結びつく事象名詞の意味内容 (Nickel 1968、相沢1999を改変)

(6) a. 外へ放出する事象

cut an order (命令する)、cut a good impression (良い印象を与える)、cut a scream (叫ぶ)、cut a smile at (～に微笑みかける)、cut a harsh stare into someone (～を睨む)

b. 内へ取り込む事象

* cut a drink of coffee (コーヒーを飲む)、* cut a sniff of the fragrance (香水を嗅ぐ)、* cut a listen to the song (歌を聴く)、* cut a taste (味わう)、* cut a liking (気に入る)

(7) a. The announcement cut a fear into their hearts

b. That book gave me a fear of clowns!

c. He also {*cut/had} a fear of heights.

3.3.4 cut a look

cut a look は個人が視線を具象物に向けるという一時的な身体活動のみを表す。have a look などとは異なり、抽象的な事柄を観察する行為までは表さない。特に have a look や take a look は、情報を内に取り込むために行なう行為を表す。それに対して cut の外向きの性質が働き、cut a

look は情報の取り込みには重点が置かれない。cut a look のふるまいもここまで見てきた「cut + NP_E」構文の特性に一致することがわかる。

- (8) a. Dawson cut a suspicious look at his friend. “You’re cooking?”.
b. *The speaker cut a {financial/historical/political} look at the problem.
c. The EU {*cuts/has/takes} a fresh look at weapons.
d. The boy {*cuts/has/takes} a positive look at the future.

3.3.5 視覚的際立ち

切り口の鋭い輪郭線という cut の様態の意味が「cut + NP_E」構文では視覚的な際立ちとなって現れる。軌跡を描く運動、対照的な色彩、目立つ風貌などが「cut + NP_E」構文でよく表される。

- (9) a. [...] in case an on coming car cut a curve too close to the other side.
b. A car travelling from the opposite direction cut a sudden left turn in front of him.
c. Dressed in fine cerulean blues, sea greens, tans or white, the clothes cut a contrast to his dark, tanned skin.
d. Whistler’s solid blue skies cut a contrast with pure white powder to leave a vivid picture in your mind.
e. As she walked in all eyes were drawn to her. She cut a striking figure in her black pants suit.

3.4 なぜ cut か？ — 「cut + 結果目的語 (NP_{Eff})」構文

ある構文に動詞が融合できるかどうかは、それぞれの表す意味が矛盾しないことが一つの条件である (Goldberg 1995、1997ほか)。「V + NP_E」構文の意味は、事象名詞句が表す事象を主体が短時間行なうことである。cut は切断動詞であるので、事象名詞が後に続く場合はその事象の中断を表しそうなものであるが、中断ではなく遂行を表す構文と融合している。ここで注目されたいのが、もう1つの構文、「cut + NP_{Eff}」構文の存在である。この構文は、切断を手段として新しいモノを創り出すことを表す。「cut + NP_E」構文は事象名詞句が表す事象を (中止ではなく) 実現することを表す。つまりこの2つの構文には、目的語にモノかコトかの違いがあるだけで、どちらも目的語の創出を描写する、という共通点がある。メタファー的拡張のリンクで継承関係が結ばれているのである。このことを踏まえると、本章で論じている「cut + NP_E」という形式は、「V + NP_E」構文のみならず、「V + NP_{Eff}」構文も土台にしており、多重継承が行われているものと推察され

る。さらには「cut + NP_Eff」構文の存在が、「cut + NP_E」構文の生起を容易にした、とも言える。

3.5 基本構文との比較

3.6 まとめ

第4章 「hit + NP_E」構文

4.1 はじめに

4.2 hit の意味

hit の意味の核は、「瞬間的な接触」で、「強い衝撃」はプロトタイプの意味に過ぎない。つまりどの hit の表現にも含まれる意味ではない。

4.3 「hit + NP_E」構文の特性

4.3.1 hit の意味の反映

hit の「瞬間的な接触」の意味が反映され、この構文は事象の開始点など、ある一点を強調する働きをする。また、この構文内に生じることができる事象名詞句の中には、下位事象 e1、e2から成る複合事象を表す名詞句もある。この場合、「hit + NP_E」構文は、e1からe2へ移行する時点を特に指し示す。ただし、使役事象を表す名詞句はこの構文内に生起することはできない。この点は「V + NP_E」構文の制約が継承されている。

- (10) a. I think we've hit a fundamental difference in philosophy here, and we'll have to agree to disagree.
b. They hit a realization of the dangers that they would face.
c. He's hit a sudden and very rapid decline. He's not limping all the time, but he can't go for a walk, because after less than a block he starts having difficulty.

4.3.2 なぜ hit か？

理由は2つ考えられる。まず1つには、hit の意味は「接触」であるので、補部が表す対象物は内部に質的な変化を受けないことが挙げられる。

2つめの理由は、hit が融合するその他の構文の存在である。結果目的語構文と hit を含んだメトニミー表現の存在は「hit + NP_E」構文を動機付ける大きな要因と考えられる。

4.4 hit と融合するその他の構文

4.4.1 「hit + 結果目的語 (NP_{Eff})」構文

この「hit + NP_{Eff}」構文と「hit + NP_E」構文は、新しく生み出すものがモノかコトかの違いがあるだけなので、両構文はメタファー拡張によるリンクによって密接に関わり合っている。

(11) a. He hit a home run in the first inning.

4.4.2 「hit + NP」メトニミー構文

この構文の目的語は、事象名詞ではないものの、その名詞に関連するイベント的な情報が動詞句の意味に大きく関わる。動詞 hit よりも目的語の方が動詞句の意味内容を担うという点で「hit + NP_E」構文と非常によく似ている。

(12) Why hit the snooze when you can hit the buffet?

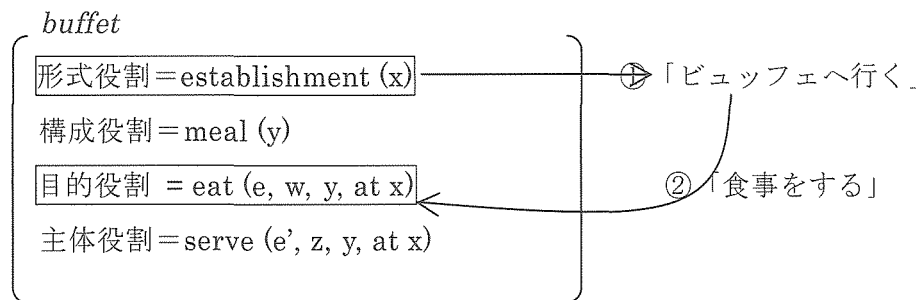


図4. buffet の特質構造

4.5 まとめ

第5章 結論

本研究では「V + NPe」構文カテゴリーが中心的メンバーと、周辺のメンバーから構成され、メンバー間の関係は用法基盤モデルによって適切に捉えられることを示した。また、どのメンバーも、「V + NPe」構文の意味に見られる慣用性と、構文の意味と動詞の意味を融合させるという合成性の両方を兼ね備えている。こうしてみると、レキシコンと文法は互いに独立しているというよりは、重なり合っていると考えるのが妥当だということになる。

また「V + NPe」構文カテゴリーのメンバー間だけではなく、結果目的語構文など、そのほかの構文とのネットワーク関係があることも示した。

参考文献

- Goldberg, A. E. 1995. *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: University of Chicago Press.
- Goldberg, A. E. 1997. The Relationships between Verbs and Constructions. M. Verspoor, K. Lee and E. Sweetser eds.. *Lexical and Syntactical Constructions and the Construction of Meaning*. Amsterdam: John Benjamins. 383-398.
- Goldberg, A. E. 2006. *Constructions at Work: The Nature of Generalization in Language*. Oxford: Oxford University Press.
- Langacker, R. W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar I*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, R. W. 1991. *Concept, Image, and Symbol*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Nickel, G. 1968. Complex Verbal Structures in English. *International Review of Applied Linguistics* 6. 1-21.
- Sapir, E. 1949. *Selected Writings of E. Sapir in Language, Culture and Personality*. D. G. Mandelbaum ed. Berkley: University of California Press.
- 相沢 佳子. 1999. 『英語基本動詞の豊かな世界一名詞との結合にみる意味の拡大』東京：開拓社。

論文審査結果の要旨

本論文は、英語の複合動詞構文 (complex verbal structure) の合成的な意味の性質を明らかにすることを目的としている。複合動詞構文とは、動詞とその目的語である事象名詞から成る構文であり、意味的な特性としては、意味内容の大半が動詞ではなく、目的語である事象名詞によって表されることである。動詞の役割は、主に時制、人称、数といった文法的情報を表すことに限られるため、この構文内の動詞は、しばしば語彙の意味を持たない動詞という意味で軽動詞 (light verb) と呼ばれてきた。従来、複合動詞構文は、非合成的な慣用的表現として扱われることが多かった。この論文は、複合動詞構文における意味の構成原理を明らかにすることにより、これまで慣用性の問題としてあまり省みられなかった意味の問題に意欲的に取り組もうとする姿勢を見せている。

第1章で以上のような研究の目的および分析の対象、先行する研究などを完結に記述した後、第2章では、この研究の理論的な枠組みである構文文法の紹介と問題点が論じられている。ここでは、本論文において重要な概念となる構文カテゴリーという概念が論じられている。構文カテゴリーとは、構文間の関係をプロトタイプ理論に基づくカテゴリー論によって捉えたものである。これによって、複合動詞構文の中心的なメンバーと周辺的なメンバーの関係性が明確になると主張される。第4章と第5章は、第2章の理論的な枠組みの中で、具体的な事例の分析を行ったものである。第

4章は、cut を用いた複合動詞構文、第5章は hit を用いた複合動詞構文を論じている。

本論文の評価として最も高かった点は、4章、5章で提示された事例分析である。これまで、慣用句として片付けられてきた cut an order (命令する), cut a glance (ちらっと見る) などが、cut (切る) という動詞の意味から説明できることが、多くのデータに基づいて実証的に論じられている。第5章も、hit という動詞を含む構文について同様の分析が行われている。この点は、この著者の分析力の高さを示すものとして評価された。また、第6章においてまとめ上げた構文カテゴリーのネットワークについても、まとめ方の確かさが評価された。ただ、審査の段階では、本論文が理論的なモデルとする構文文法と3章、4章で提示された分析との関連性に疑問も出された。しかし、最終試験における質疑応答においてその点は明確に論証されたと審査員は認めた。

本論文は、論文提出者が自立して研究活動を行う高い研究能力と学識を備えていることを示すものである。よって、本論文は、博士(国際文化)の学位論文として合格と認める。